「国語教育研究」第六十一号（令和二年三月刊）

図表を用いて論述する練習作文教材の開発

――高校入試問題の分析をとおして――

木本一成

はじめに

中学校で使用されている国語科教科書の中には、本文編と資料編に分けて編集されているものがある。その資料編に、発展的な読書や文法事項などのほかに、図表を用いた作文教材（以下、「図表教材」とよぶ）が掲載されているものもある。資料編の図表教材は、本文編の図表教材に比べてページ数が少なく、内容も図表の読み取り方やレポートの構成など特定の事項に特化されているものが多く、練習教材という位置づけである。このような図表教材は、図表を用いた作文指導を「短時間で実施したい」、「異なる題材で何回も繰り返し指導したい」という思いを抱く教師にとっては有益である。一方で実際に指導しようとすると、題材が魅力的でない、題材数が少ない、指導内容が曖昧であるなどの不満を抱くようなこともある。

練習作文としての図表教材をどのように開発すればよいだろうか。

その手がかりの一つとして、高等学校の入学試験で出題される図表を含む問題（以下、便宜的に「図表問題」とよぶ）の活用が考えられる。入試問題は、その性格上、受験生に公平・公正に作成されていて、受験生が短時間で問題を読んで文章を作成することができ、明確な基準で採点されるように作られている。さらに、出題に際してミスが許されないという点でよく考えて作られているものが多い。練習作文としての図表教材の開発を考えるとき、入試問題に学ぶことは意義がある。

1．研究目的と研究方法

（1）研究目的

・図表問題がどのように改善されてきたかを分析することによって、「図表を用いて自分の考えを述べる」学習でどのような表現力が求められているかを明らかにする。

・図表問題を題材にしてどのような練習作文を開発することができるか、その可能性を探る。

(2) 研究方法

① 研究対象

・高等学校入学試験で出題された「図表が含まれている問題」のうち、次の二つの条件にあてはまるものを対象とした。

a．『全国高校入試問題正解　国語』旺文社（2004年受験用～2018年受験用）に掲載されている公立高校の入試問題。

b．問題文の中に、数値を示すグラフや表が掲載されているもの（年表や地図、概念図などは除く）。

② 研究方法

・図表問題が過去15年間にどのように変化しているか、特に、「どのような図表を用いて何を書かせようとしているか（内容）」、「どのように書かせようとしているか（方法）」という点について、顕著な変化を明らかにする。

・優れた入試問題を用いて、どのような図表問題の練習教材を開発することができるか、その事例を示す。

2．高校入試問題の全体的な傾向

(1) 高校入試の作文問題の状況

高校入試で出題される作文課題（以下、「入試作文」とよぶ）には、題材や資料を読ませたうえで「自分の考え」を書け、と指示するものがある。このような入試作文がかかえる問題点について優れた批判的検討を行ったものに、関口（2014）[1]の研究がある。関口は、渡辺（2006）[2]や八田（2008）[3]の研究を手がかりに、入試作文の全国的な動向を調査している。対象としたのは、全国の2003年度～2013年度の高校入試問題の作文課題である。（関口が取り上げたのは入試作文であって、図表問題に限定した入試作文ではない。）

関口は、入試作文の文種を次の4つに分類した。[4]

①〈議論文〉 想定すべき対立的な意見が求められるもの

②〈意見／感想文〉 想定すべき対立的な意見がなく、自分の意見や感想が求められるもの

③〈随筆文〉 想定すべき対立的な意見がなく、あるテーマについて文章をまとめることが求められるもの

④〈紹介／説明文〉 意見・感想とは異なる文種であるもの

そして、十一年間分の作文課題を調査した結果、次のように言う。

この分類指標に従って、全国の高校入試作文を分析した結果、（引用者略）2003年度の段階では、「議論文」と「意見／感想文」の合計は全体の6割を少し越える程度であったが、2013年度では、8割以上がこうしたタイプの作文となっている。つまり、日本の高校入試においては、「自分の考えを書く」ということは、主要なテーマなのである。[5]

入試作文で「自分の考え」を書かせるものは多いと言う。公平性

や厳格な採点基準などが求められる入試問題の特性に照らすと、入試問題で「自分の考え」を書かせるのはあまり好ましくないように思われるが、実際はそうではないようだ。関口によると、もともと「6割を少し越える程度」で多かったものが、さらに「8割以上」に増加する傾向であるというから驚きである。

さらに、関口がまとめた調査結果からは、文種の割合はおおよそ次のような傾向にあることがわかる。[6]

①議論文（約15％）　②意見／感想文（約70％）
③随筆文（約10％）　④紹介／説明文（約5％）

「自分の考え」を述べるために用いる文種は、「意見／感想文」が約70％と大部分を占めるのに対して、「議論文」はわずか15％程度と少ない。「意見／感想文」が多くて「議論文」が少ないという傾向は、何を示しているのだろうか。関口は、秋田県の入試作文の事例を示しながら、次のように言う。

例えば、2008年の作文課題は、「敬語の使い方について、『あなたの考え』をこれまで体験したことや具体例をもとに書く」というものだ。これは、想定すべき対立的な意見があるわけではないが、「自分の考え」が求められる「意見文」に分類したものである。この課題は自分の体験などを具体例としてふまえることが求められてはいるが、必ずしも根拠を伴った「自分の考え」の提示でなくても採点基準はクリアできてしまう。（引用者略）

ここに日本のテストの「自分の考え」観が見出せる。「自分の考え」は入試では以前から問われる主要なテーマである。しかし、その「自分の考え」とは、明確な根拠を伴った主張という類のものではなく、漠然と自分で考えたことを述べる程度でも受け入れられてしまうものなのだ。[7]

関口の主張は、まとめれば次の二点に集約される。

・入試作文で想定されている「自分の考え」とは、漠然とした自分の思いのことであって、対立意見が存在するような明確な主張ではない。
・「自分の考え」を支える理由には、明確な根拠を取り上げて論を展開するようなことは求められていない。

入試作文に対して極めて厳しい指摘である。

(2) 図表問題の全国的な傾向

関口の先行研究を踏まえながら、調査対象を図表を含むものに限定するとともに、対象年度を2017年度実施分まで広げて見ていくこととする。

次の表は、図表を含む問題が何題出題されたかを整理したものである。内訳を示す「作文」は書くことの問題を、「読・作文」は読むことと書くことの融合問題をそれぞれ示している。

この表から次のようなことが分かる。問題数は、年平均すると約11題になる。調査対象の高校は毎年約55校程度なので、単純計算すれば5校で1校の割合で出題されていることになり、決して少なくない割合で出題されているといえる。また、2008年からは問題数が増えるとともに、「作文」だけでなく「読む」「話す聞く」の領

年度別　図表問題の掲載状況

掲載年	実施年	問題数	作文	読・作文	話聞・作文	読む	話す聞く	グラフ	表
			問題数の内訳						
2004	2003	5	3	2				7	
2005	2004	6	4	2				7	
2006	2005	7	7					6	1
2007	2006	8	6		1	1		9	
2008	2007	1	1					1	
2009	2008	9	3	1		5		14	
2010	2009	13	7	1		5		15	2
2011	2010	8	3	2		3		8	1
2012	2011	14	5			3	6	14	5
2013	2012	14	7		2	2	3	13	4
2014	2013	9	5			2	2	14	
2015	2014	18	13	1	1		3	27	4
2016	2015	13	9				4	13	3
2017	2016	16	10		3	1	2	19	6
2018	2017	18	10			2	6	30	2

単位は個数

域の問題も増加している。学習指導要領の改訂や全国学力・学習状況調査の実施の時期との関連が推測される。なお、出題される図表の種類は、表よりもグラフが圧倒的に多い。

3. 個別の図表問題の分析

実際に出題された図表を取り上げて、特徴と問題点を分析していくこととする。（見出しに付した名称は、実施年度、都道府県名、便宜的な題材名を示す。）

（1）2003福井「働く目的」

最初に取り上げるのは、2003年度福井県で出題された図表問題である。

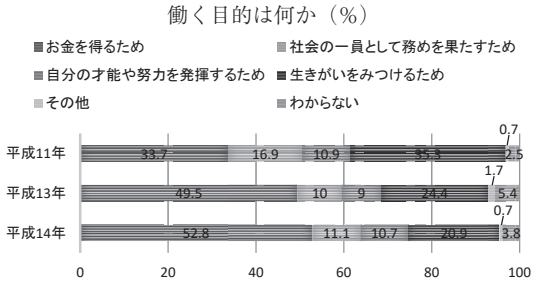
次のグラフは、内閣府が二十歳以上の人々を対象に行った「国民生活に関する世論調査」の一部で、「働く目的は何か」という質問に対する答えの割合を示したものである。（平成十二年については、調査をしていない。）

このグラフを見て気づいたことと、「働く目的は何か」に対する自分の考えを、あとの注意に従って書け。

注意　1　本文は二段落構成にし、第一段落には、グラフを見て気づいたことを書き、第二段落には、第一段落を踏まえて働く目的についての自分の考えを書くこと。（引用者略）

※　本稿で引用する入試問題は、掲載された問題の一部を省略している。また、図表は実際の問題に似せて論者が作成したものである。

文種の分類基準（関口）にあてはめると、この図表問題は、「議論文」ではなく、「意見／感想文」になる。



提示されたグラフを見ると、働く目的として「お金を得るため」が最も大きな割合を占めている。しかも、その割合は年々増加している。このことを取り上げて、「お金目的で働くのはよくない」、「格差が広がる傾向にあるなか、お金目的という人の割合が増加するのはやむを得ない」など、「自分の考え」を述べることができる。

また、「生きがい」という項目を取り上げて、その割合が年々著しく減少していることを指摘したり、「生きがい」の大切さを述べたりしてもよい。

このように、この問題は、グラフが指し示す内容を取り上げ、その内容に関係する主張を述べていれば何を書いてもよい、という設定になっている。つまり、明確な対立意見が想定されていない、ある程度自由に自分の思いを書くことができるということから、「議論文」を書かせようとしているわけではない、ということができる。

さらに、グラフから読み取ったこと（根拠）と「自分の考え」との関係は、必ずしも論理的である必要はなく、類似の経験をあげて主張につなげたり、個人的な価値観や理念に照らして主張につなげてもかまわない。つまり、根拠と主張の関係は、多少飛躍や誇張などがあったとしても、ある程度常識的な範囲内で関係づけられていればよい、という姿勢である。

関口が指摘した入試作文に見られる問題点が、この図表問題からもうかがうことができる。

（2）2013福井「地域交流」

2003福井「働く目的」から10年後、同じ福井県で出題された図表問題は内容が大きく変化している。

ある中学校のクラスで、一学期の「総合的な学習の時間」において、地域との交流を深める活動を進めていくことになった。そこで、どのような活動をするか、クラスでアンケートを行い、資料A、Bにまとめた。次の話し合いと資料を読んで、あなたの意見をあとの注意に従って書け。

注意　2　第一段落には、あなたが鈴木さんと山口さんのどちらの意見に賛成するか、理由をつけて書くこと。

3　第二段落には、あなたなら地域の誰とどのような活動をするか、資料と関連付けて、具体的に書くこと。ただし、第一段落に書いたことを踏まえること。（引用者略）

司会者　一学期の「総合的な学習の時間」で、地域との交流を深めようということになりました。今日は、誰とどのような活動を進めていくかを、具体的に考えていきたいと思います。

鈴木さん　資料Aを見ると、地域の人々を楽しませる活動がしたいという意見が多いみたいですね。

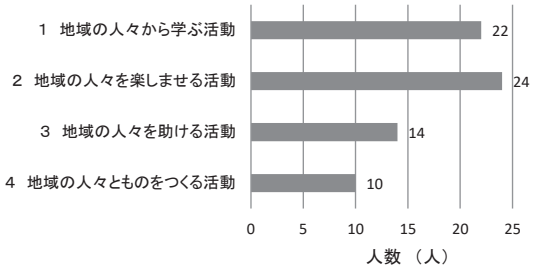
山口さん　でも、圧倒的というわけでもないですよ。地域の人々から学ぶ活動がしたいという意見も同じくらいあります。

鈴木さん　私は、資料Aの2や3のように、地域の人々に対して自分たちができることを積極的にしていく活動がよいのではないかと思います。

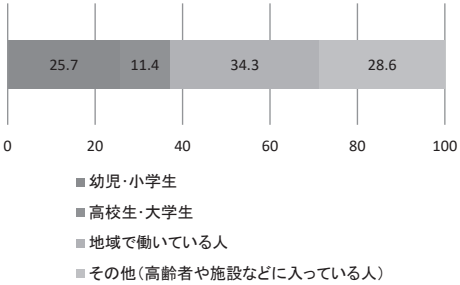
山口さん　私は、資料Aの1や4のように、地域の人々からいろいろ教えてもらうことで、地域についてもっとよく知りたいと思います。

司会者　どの活動が地域との交流を深められるでしょうか。資料Bも使って、もっと具体的に考えていきましょう。

資料Ａ　どのような活動をするか（複数回答可）



資料Ｂ　地域の誰と交流を深めるか



資料の数が、グラフ一つ（２００３）から、発話記録一つ・グラフ二つ（２０１３）に増加している。後者について、三つの資料は、活動の内容と活動の対象という関係を示したグラフと、そのグラフを第三者が解釈した発話記録という関係になっている。受験者は、自分がグラフをどのように解釈するか、グラフをもとに話し合っている内容をどのように解釈するか、ということの両方を読み取らなければならない問題になっている。

設問の「注意2」には、「あなたが鈴木さんと山口さんのどちらの意見に賛成するか」とあり、二つの意見のうちどちらかを選択するようになっている。両方に賛成とか、一部賛成、条件つきで賛成などは想定されておらず、自分が自由に意見を考えて書くようなことは認められていない。二つの意見は発話記録にもあるように明確に異なる意見として示されていて、一方に賛成するということは、他方に反対するという関係である。関口の分類にあてはめると、この図表問題は「議論文」になる。

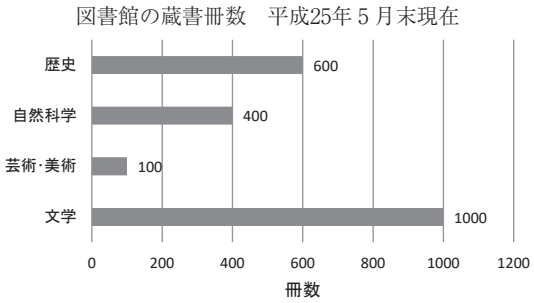
「自分の考え」については、提示された二つの意見の内のいずれかを選択すればよく、選択そのものに重点は置かれていない。大事なのは、その選択の理由を書くことである。その理由の書き方について、「注意3」には、「地域の誰とどのような活動をするか」とある。「誰（対象者）」、「どのような活動（内容）」という観点でグラフを読み取ることと同時に、「対象者」「内容」について、自分の生活経験や知識に照らし合わせて具体化することを求めている。例えば、「地域の人々から学ぶ活動」であれば、具体的に「郷土史家から地域の歴史を学ぶ」「自治会長から地域の自然と安全を学ぶ」「福祉施設の人から地域の福祉を学ぶ」などを取り上げるということである。根拠と主張につながるように理由を具体的に書くことが求められているという点で、２００３年の問題とは大きく異なる。原口が指摘した問題点が解消しつつあると評価することができる。

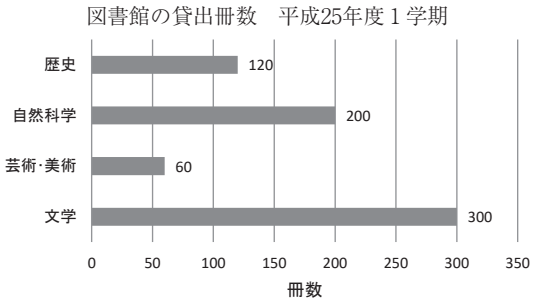
（3）２０１４岐阜「図書の購入」

２０１３福井「地域交流」のように、「自分の考え」の設定や「根拠をもとにした理由」の書き方に改善がはかられた図表問題が、こ

の頃から他県でも出題されるようになる。次にあげるのは、平易な資料ではあるが、書き方を考えさせるよく工夫された問題である。

次の二つのグラフは、A中学校の「図書館の蔵書冊数」と「図書館の貸出冊数」を表している。今後、A中学校ではグラフの四つの分類のうち、どの分類の図書を購入するのがよいと思うか。あなたの考えを書きなさい。段落構成は、二段落構成とし、第一段落ではあなたの考えを、第二段落ではそのように考えた理由を二つのグラフを根拠に書きなさい。（引用者略）





「自分の考え」は、四つの分類（歴史、自然科学、芸術・美術、文学）の中から一つを選択したものである。受験者はどれを選択してもよい、という設定になっている。設問の中心は、「自分の考え」の理由を二つのグラフを用いて論理的に書くことにある。特に、グラフからなぜそのように判断したのか、明確な判断の基準を示すことが求められている。

ところで、この問題を掲載した旺文社の編集者は、「解答例」「解き方」を次のように示している。

〈解答例〉

私は、自然科学に分類される図書を購入するのがよいと考える。二つのグラフを見ると、蔵書冊数における貸出冊数の比率が高いのは、芸術・美術の分類が第一位で自然科学の分類が第二位になっている。貸出冊数と比率の両方から勘案すると、自然科学関係の本を購入するのが、生徒の希望に沿った形になると考える。

〈解き方〉

貸出冊数のグラフのみを見ると、文学の分類が三百冊と一番多く読まれているが、蔵書冊数を見ると千冊と圧倒的に多いので、当然と言える。むしろ、歴史、自然科学、芸術・美術の各分類を比較したほうが論が進めやすい。そこで、解答例では、蔵書冊数と貸出冊数の比率を出してみた。歴史が二十パーセント、自然科学が五十パーセント、芸術・美術が六十パーセントとなる。ただ、芸術・美術は、蔵書冊数が百冊、貸出冊数も六十冊と少なく、データ的な信頼性が薄いので、自然科学に分類される本を購入す

るのがよいという結論にした。[8]

「解き方」の説明の最後に「という結論にした」とあり、編集者も解答に困っている様子がうかがえる。この表現からも推測できるように、確かに編者が作成した模範解答は納得できるような説明が十分おこなわれているとは言いがたい。

「解答例」に「貸出冊数の比率が高いのは」とあって、根拠となる数値（順位）が示されているが、なぜその数値（順位）から「自然科学がよい」という主張ができるのか、その説明が欠落しているからである。そもそも、「第一位」ではなく「第二位」を選択するのがよいと考えたのはなぜかを示さなければならない。つまり、そのように判断する理由（判断基準）を示す必要がある。「解き方」には、「千冊と圧倒的に多い」「データ的な信頼性が薄い」とあり、別の判断基準も書かれている。その都度判断基準が変わっていて、論理的な説明とは言いがたい。

このような初歩的な問題点を、編集者が見落としていたわけではなかろう。論理的に正しく説明しようとするのであれば、判断基準を示すだけでなく、他の三つの分類は適切でないことを説明しなければならない。そのためには、指定されている160字以内という条件では書けない。このようなことを考えた上で、やむを得ずこのような模範解答になったのだと思われる。このことは、別の言い方をすれば、指定字数を増やしてある程度の分量にすれば面白い議論文を書かせることができるという可能性を示している。

（4）2014福井「公園の遊具」

関口の研究の核心は、引用の論文タイトルにもあるように、中学・高校教育において「批判的思考力が日本に定着しなかった理由」を明らかにすることである。そのために、高校入試の「自分の考えを書け」という作文問題を取り上げて、受験生に何をどのように考えさせようとしているかを明らかにしようとした。関口は、入試問題で批判的思考を問うことが難しいという事情は考慮しながらも、次のように批判的思考を扱わないことで生じる問題も小さくないことを指摘する。

たとえオープンエンドの作文課題であったとしても、「批判的思考」のような広範で多義的な要素を含む力を問うことはかなり難しい。これが、入試が「批判的思考力」を問わなかった、あるいは、問えなかった要因の一つであると考えられる。／しかし、そうした多くの限定が付与されたテストが、入試という強い価値づけがなされ、1つのスタンダードとなってきたことは看過できることではない。入試が先の高校における国語教育（読解教育）の特徴に代表されるような学習と連動することで、そこには学びがひどく痩せたものになり得る要因が多分に含まれているからだ。ただし、諸々の制約のある入試においてでさえ、「議論文」などのように「批判的思考」を促し得る課題の出題がみられるのも事実だ。[9]

入試で批判的思考をともなう作文課題を避けてきたことが、今日

のような表現教育の問題を引き起こした原因であると言う。また同時に、徐々にではあるが批判的思考を伴う作文課題も見られるようになったとも言う。次にあげる２０１４福井「公園の遊具」は、入試問題という諸々の制約がある中であえて批判的思考力につながるであろう内容を出題した優れた図表問題である。

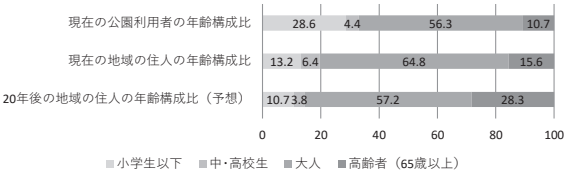
ある中学校の近くに公園ができることになった。地域にはどのような公園が望ましいかについて、次の三つの代表的な意見がある。三つの意見と資料Ａ、Ｂを読んで、新しくできる公園について、あなたの意見をあとの注意に従って書け。

中村さん（十歳　女子）
最近、近くの公園から滑り台やブランコがなくなりました。そのような遊具は危ないという理由からです。
しかし、滑り台やブランコもきちんとした遊び方をすれば、けがをすることはありません。いろいろな遊具がある方が、友だちと一緒に体を動かして楽しく遊ぶことができます。家でゲームばかりしている友だちも、公園に遊びにくるようになると思います。だから、遊具がたくさんある公園にしてください。

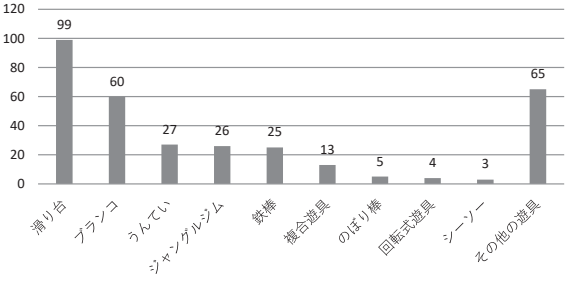
島田さん（三十五歳　女性）
公園には木々と花々、それに広場とベンチがあれば十分です。いろいろな器具を設置するのではなく、使う人の自由に任せてよいのではないでしょうか。何か目的をもって器具を設置すれば、利用する対象者が限られてしまうと思います。
いろいろな年代の人が集まってきて、思い思いの過ごし方ができる、この地域に住むすべての人が利用できる広場のような公園が一番よいと思います。

宮川さん（六十五歳　男性）
公園は子どもが使う場所と思いがちですが、実は我々の年代も使うことが増えてきています。滑り台にブランコ、ジャングルジムというのがひと昔前の定番でしたが、最近、背伸ばしベンチ、ぶら下がり器具など、体力維持のための健康遊具が増えています。
健康に不安が出てきた我々の年代こそ、ウォーキングや体操、それに健康遊具で体力を保つべきです。だから新しい公園では、ぜひ健康遊具を設置してください。

資料Ａ　この地域の公園利用者と住人の年齢構成比



資料Ｂ　この地域の遊具別事故の救急搬送人数（過去10年分）



単位（人）

注意　2　第一段落には、あなたが賛成する意見を一つ選び、理由をつけて書くこと。
3　第二段落には、第一段落で選ばなかった二つの意見について、あなたが選ばなかった理由を説明すること。その際、第二段落は「それに対して」で書き始めること。（引用者略）

「注意2」に「あなたが賛成する意見を一つ選び」とあるように、提示されている三つ意見の中から選んだ一つが「自分の考え」になる。残りの二つの意見とは明確に異なるということから、この図表問題は「議論文」である。

また、「注意3」には、「選ばなかった二つの意見について、あなたが選ばなかった理由を説明すること」とある。選んだ意見について、それが正しいという理由をあげるのは当然である。ここでは、選ばなかった意見についても、あえてそれが正しくないという理由をあげることを求めている。つまり、選ばなかった二つの意見について、それぞれの意見を支える根拠と理由にはどこに誤りがあるかを示せというのである。間違っている点を指摘するには、ものごとを批判的に見るという姿勢が伴うことになる。

さらに、文章表現について、「第二段落は「それに対して」で書き始めること」とある。批判的に書く際に、対比的表現を意図的に使用することを要求している。

この入試問題は、関口の言う批判的な思考を促し得る課題になる可能性を秘めた図表問題である、ということができるのではないだろうか。

4．図表問題を用いた教材化の試み

これまで見てきたように、２０１３年度以降の入試問題の中には、図表を用いて自分の考えを書かせる教材の題材として有益なものがあることが分かる。そこで、その中の一つである２０１４岐阜「図書の購入」を用いて次のような練習作文の教材化を構想した。

（1）教材の概要

①　教材名　：　練習作文「図表を用いて自分の考えを述べる」
③　資料　：　２０１４岐阜「図書の購入」
③　学年　：　中学三年
④　ねらい　：　図表を根拠にして自分の考えを８００字程度で論述する議論文の書き方を習得する。

（2）学習計画

①　第１時
・題材（図書館の本）について、経験として知っていることを想起する。
・論題で指し示された課題（「四分類から一つを選択する」「図表を用いて理由を述べる」）を理解する。
・グラフから分かることをすべて書き出す。
・「自分の考え」として、四つの中から一つを選ぶ。
・選んだ理由と、他の主張を選ばなかった理由を考える。

②　第2時

・グラフから、自分の考えを支える根拠となる内容を読み取る。

・グラフから、自分とは異なる考え（異論）を否定する材料となる内容を読み取る。

・グラフから読み取った内容を効果的に表現する方法を理解する。（数値が示す内容を強調する表現、対比的に示す表現、判断基準を示す表現、など。）

・「自分の考え」を論理的に展開するための文章構成の一例として、「問い　→　図表の引用　→　図表の解釈　→　主張（答え）」という展開を理解する。

・グラフを用いて議論文の前半を書く。

③　第3時

・前半部分を修正しながら議論文の後半部分を書く。

・書き上げた議論文を読みあう。

（3）大学生が作成した作文

次に示すのは、論者が勤務する大学の日本語文章表現系の科目を履修している大学生に書かせたものである。

Z中学校では、どの本を購入すればよいのだろうか。

まず、図書館の蔵書冊数についての観点から、どの分類の本を購入するべきかを考察する。

図Bは、Z中学校図書館の平成25年5月末現在における蔵書冊数を示したグラフである。

（図B「図書館の蔵書冊数」省略）

この図から次のことが分かる。この図書館には２１００冊の本が存在する。そのうち、最も図書館における精選されて購入されている本は、芸術・美術である。これは、全体の２１００冊のうち１００冊しかないのである。これは、全体の一パーセントにも満たない０・５パーセントに当たる冊数である。一方で、自然科学は４００冊、歴史は６００冊もあり多い。さらには文学については１０００冊もあり非常に多いため、これらは充足していると考えられる。

このことから、何が不足しているのかという点で考えると芸術・美術を購入するのがよいといえる。

次に、先の図Bの蔵書冊数のデータに加え、図書館の貸出冊数についての観点から、どの分類の本を購入するべきかを考察する。

図Aは、Z中学校図書館の平成25年度一学期における貸出冊数を示したグラフである。

（図A「図書館の貸出冊数」省略）

この図から次のことが分かる。最も貸出冊数が多いのは、３００冊である文学である。続いて自然科学が２００冊、歴史が１２０冊となっている。そして、最も貸出冊数が少ないのは芸術・美術である。しかし、回転率を貸出冊数／蔵書冊数という計算式により求めるとそれらの数値は逆転する。文学は全体のうち30％しか借りられておらず、自然科学は50％、歴史においては20％しか借りられていない。一方で、芸術・美術においては全体のうちの60％も貸出しされている。

このことから、回転率という観点から見た場合には芸術・美術を購入するのがよいといえる。

上記では、不足している本についてと回転率という二つの観点からどの本を購入すればよいか考察した。そして、それらのどちらも芸術・美術の本を購入するべきであるという結論に至った。

この作文例では、自分の考えの理由を言うために、グラフから読み取れる数値をあげるだけではなく、「何が不足しているのか」「回転率」という表現で判断基準を示そうとしている。なぜ「不足している」ことや「回転率（貸出率）」が判断基準になるのかについての説明は欠落しているが、単に数値を示して「多い」「少ない」ということを理由に主張するのと比べれば丁寧な論述である。

このような書き方は、「芸術・美術」以外を選んだ場合でも可能である。学習者がそれぞれ異なる考えを選び、異なる数値に着目し新たな判断基準で理由を述べていけば、内容的にも面白い教材になることが期待される。

5. 結論

高校入試で出題される図表問題の中には、よく考えられた「議論文」も登場するようになった。その中には、短時間で書き方を学ぶことに特化した練習作文の教材として可能性を秘めたものもある、ということが分かった。

【引用文献】

1　関口貴之（２０１４）「高校入試問題から考える批判的思考力―批判的思考力が日本に定着しなかった理由の一考察―」、「横浜国大国語研究32」（横浜国立大学国語・日本語教育学会）

2　渡辺貴裕（２００６）「「平成13年度小中学校教育課程実施状況調査」が測る国語の「学力」―「自分の考え」記述問題に着目して―」、「教育目標・評価学会紀要　第16号」、教育目標・評価学会

3　八田幸恵（２００８）「国語の学力と読解リテラシー―「自分の考え」とは何か―」、『新しい学力テストを読み解く』田中耕治 編（日本標準）

4　1に同じ。

5　1に同じ。

6　1に同じ。

7　1に同じ。

8　株式会社 旺文社（２０１４）『２０１５年受験用 全国高校入試問題正解 国語』（旺文社）

9　1に同じ。

（広島経済大学）